少年マルコ・ポーロの冒険

竹内日出男

竹内日出男（たけうち・ひでお）

1933年　兵庫県生まれ。

1957年　東京大学文学部卒業。

同　年　ＮＨＫ入局。

ラジオドラマ制作演出にあたり、芸術祭優秀賞、放送作家協会演出者賞等を受賞。

テレビドラマ制作に移り、「北の家族」、「新坊ちゃん」、「ドラマ人間模様」等制作。

1977年　ＮＨＫを辞し、文筆活動に入る。

検印廃止

昭和54年11月１日　第１刷発行　**定価880円**

著　者　竹内日出男
発行者　藤根井和夫
印　刷　東京ＪＰ
㈱光邦
近代美術
製　本　田中製本

発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41－1
郵便番号150振替東京1-49701

造本には十分注意しておりますが、万一乱丁本、落丁本がございましたらお取り替えいたします。

少年マルコ・ポーロの冒険

竹崎

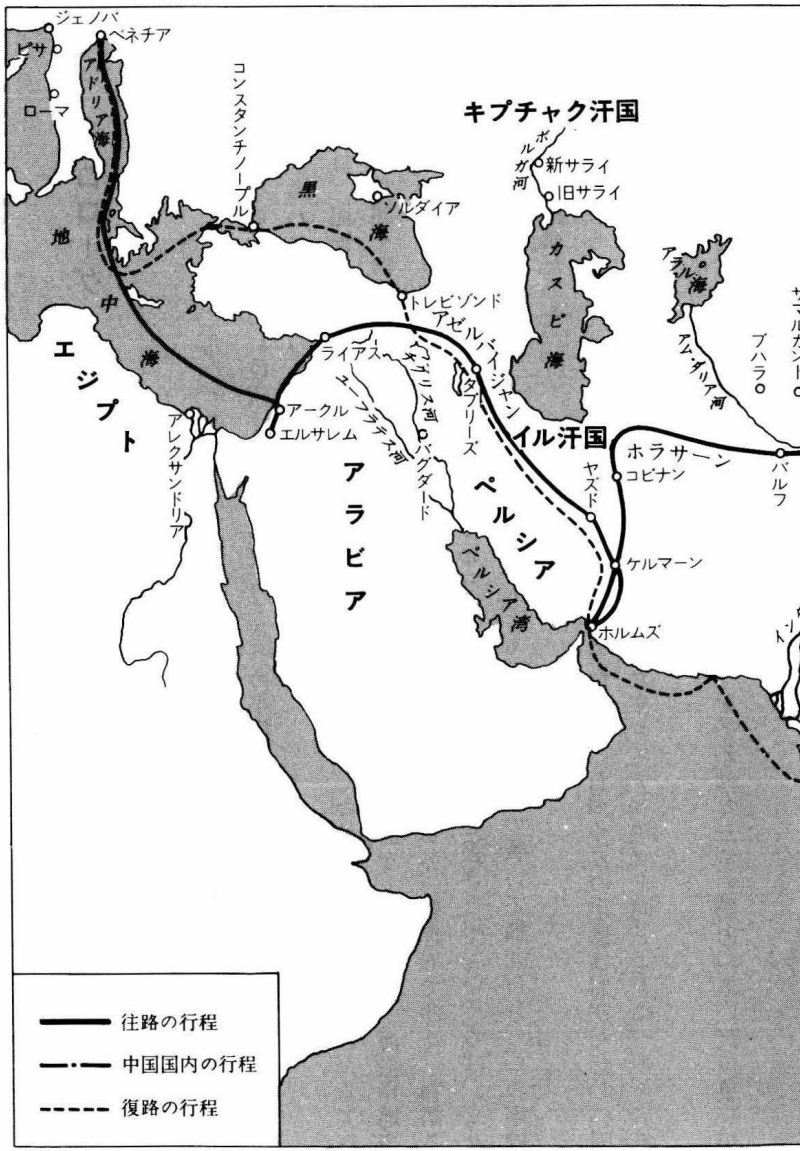
© 1979 Takeuchi Hideo

装幀／安彦デザイン事務所：柿崎　寿
挿画／高田　勲
写真／ＮＨＫ取材班

プロローグ……6
第一章　旅立ち……15
第二章　卑怯者は去れ……49
第三章　砂漠の盗賊カラウナス……83
第四章　熱い海、熱い砂……129
第五章　反乱……155
第六章　春の狩人……195
第七章　消えた足跡……229
第八章　東方の国……263
エピローグ……310

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

マルコ・ポーロの主な行程


ジェノバ
ベネチア
ピサ
ローマ
アドリア海
コンスタンチノープル
キプチャク汗国
ボルガ河
新サライ
旧サライ
黒
海
ソルダイア
地
中
海
エジプト
カスピ海
アラル海
アム・ダリア河
サマルカンド
ブハラ
トレビゾンド
アゼルバイジャン
ライアス
タブリーズ
アークル
エルサレム
アレクサンドリア
ユーフラテス河
バグダード
ペルシア
ホラサーン
コビナン
ヤズド
バルフ
ケルマーン
ペルシア湾
ホルムズ
アラビア
往路の行程
中国国内の行程
復路の行程

プロローグ

十三世紀も終りに近い一二九八年のことだった。

イタリア半島の西のつけねに位置する都市国家ジェノバの牢獄の一室で、くる日もくる日も二人の囚人が顔をつきあわせ、一つの仕事に熱中していた。

一人の囚人は、記憶の底からしぼり出すように、かつて彼が経験した前後二十六年にもわたるアジアへの大旅行の見聞を物語る。もう一人の囚人は、遠い国のその珍しい話を、当時の地中海沿岸地方の共通語であったイタリア語化したフランス語で、鵞ペン片手に書きしるし、整理してゆく。物語る男は、水の都として知られるベネチアの商人マルコ・ポーロ、その話を書きとめていくのは、ピサ（その約五十年後に完成した『斜塔』で有名な町）の物語作者ルスチケルロ――二人とも、ジェノバとの戦いで捕えられ、この牢獄へつれてこられた捕虜だった。

むろん、捕虜は彼ら二人だけではなかった。それどころか、この石づくりの牢獄はおびただしい囚人であふれていた。囚人たちはほとんどが、マルコ・ポーロやルスチケルロと同じようにベネチアやピサの市民だった。

当時、東地中海地方では、この二つの都市国家とジェノバをあわせた三つの勢力のあいだで争いが

絶えず、海上ではしばしば血で血を洗う海戦がくり返されていた。三つの都市国家はいずれも貿易に生命をかけている港町だったから、海上の支配権を獲得し、東地中海沿岸から東方へとつながる要所を押さえておくことが何よりも大切だった。この商売仇どうしが何かにつけて争い、競いあったのは、当然のなりゆきといえた。だが、争いに犠牲者はつきものである。血なまぐさい海戦のたびに多くの死者や捕虜が出た。捕虜たちは鉄鎖でつながれて敵の町へひきたてられ、太陽の光のとどかない暗い石牢に閉じこめられた。

そこでは、もはや何一つ自由は許されず、ただその日その日の命を長らえるだけである。戦いはいつ果てるとも知れず、解放される日があるのかどうかさえわからない。そんな幽閉の暮らしのなかでは、冷たい石の壁に向かって身の不運を嘆くか、自由の身だったころの楽しい思い出や自慢話などを仲間どうしで語りあうほかはない。誰もかれもが、囚われの心を慰める珍しい話に飢えていた。

さて、ジェノバの牢獄のなかでは、四十代なかばのベネチア市民、ひげづらのマルコ・ポーロの体験談ほど面白いものはなかった。

今でこそ囚人だが、この中年のベネチア商人は、若いころはるかアジアの果てまで旅行し、謎にみちたタルタル人の大帝に見こまれ、その重臣にまでなった男だった。タルタルというのは、『地獄からきた者』という意味で、当時のヨーロッパ人が自分たちの国さえおびやかしかねない遠いアジアの草原の民、強力なモンゴル人につけた呼び名である。マルコ・ポーロは、信じ難いほど強大なそのタルタル帝国の大帝のお気に入りだったというのである。これだけでも度胆を抜かれるような話だった。加えて、彼の語る遠い国々の物語は、どれをとっても人びとの想像を越えずにはいなかった。砂

漠のなかでの冒険や町々で見聞したさまざまな奇跡、おそろしい盗賊団、タルタルの大帝フビライの豪華な宮殿と莫大な富、黄金の国ジパング、南の国の大蛇や怪鳥――次から次へと尽きることのない彼の話は、沈みがちな囚人たちの心を楽しませ興奮させた。

マルコ・ポーロがいつからこの牢獄につながれていたのかは、いくつかの説があってはっきりとはしない。つながれた期間は一年たらずであったとも、三年あまりであったともいわれる。が、ともあれ、この大旅行家の噂は、やがて、牢獄のなかだけにとどまらず、ジェノバの市民や貴族のあいだにもひろまった。

むろん、時は暗黒時代といわれる中世である。遠いアジアの事情はほとんど知られず、人びとはさまざまな偏見にみちていた。マルコ・ポーロをほら吹き扱いした人びとがいたとしても無理はない。けれども、一方では、不便で閉鎖的な時代だったからこそ、外の世界に好奇の眼を向け、彼の話に身をのり出してくる人びとも少なくなかったはずである。

そんな人びとに支えられて、マルコ・ポーロはあの前後二十六年間にもわたる東方への旅の見聞を、一冊の書物にまとめてみようと思いたった。幸い同じ牢獄のなかに、老練な物語作者のルスチケルロがいた。幽閉の身だから、時間だけはたっぷりとあった。

こうしていつのころからか、二人の囚人の共同作業がはじまった。

牢獄の長官もたぶん理解者だったのだろう、二人の囚人は比較的恵まれた扱いを受けることになった。マルコ・ポーロとルスチケルロの部屋は、ほかの石牢とちがって、ずっと明るく清潔なところだったろう。それに何といっても、そこには机と椅子があり、鵞ペンとインクがあった。口述をすすめ

るために、マルコ・ポーロは特別の許可をもらってベネチアからノートを取りよせたらしい。あの大旅行のあいだ欠かさずつけていたノートである。そこには誰も知らない東の国の人びとの珍しい風俗や物産のかずかずが、びっしりとメモされていた。その綿密なノートとすぐれた記憶力によって、彼の旅行記――わが国を黄金の国『ジパング』の名ではじめてヨーロッパに紹介した『東方見聞録』は、少しずつ形をなしていったのである。

さて、ここでわたしたちは、当時の世界の歴史をおおざっぱに振り返っておく必要がありそうだ。十三世紀といえば、日本ではちょうど鎌倉時代にあたる。源氏は早々に滅びて、鎌倉幕府では北条氏の執権政治がつづいていた。

このころのヨーロッパでは、およそ二百年にわたる十字軍の時代が、その末期にさしかかっていた。十字軍というのは、長くイスラム教徒（ヨーロッパの人びとは彼らをサラセン人と呼んだ）に支配されていた聖地エルサレムを取りもどそうとして、ローマ教皇の命令によって起こされた西ヨーロッパ諸侯、騎士による遠征軍である。大規模なものだけでも七回にわたる十字軍が地中海を渡っている。だが、エルサレムはキリスト教徒やユダヤ教徒だけでなく、イスラム教徒にとっても等しく神聖な都市である。十字軍が侵略者とみなされたのも無理はない。当然イスラム側の抵抗は強く、いったん十字軍が占領したエルサレムは二転三転しながらイスラム教徒に奪い返された。十字軍のほうでも、時として聖地回復というはじめの目的が忘れられて、分捕品に満足したり、地中海沿岸の領地拡大に血まなこになるだけの傾向もみられた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イタリア沿岸の商人たちは、この十字軍と組んで莫大な利益をあげることが多かった。例えば、ベネチアは一二〇二年の第四次十字軍と同盟して、同じキリスト教国であるビザンツ（東ローマ）帝国を攻め、東西貿易のかなめともいうべき国際商業都市コンスタンチノープル（今のトルコのイスタンブール）を占領、その富を掠奪してマルマラ海から黒海にいたる海上権を握った。以後も、ベネチア、ジェノバなどの都市国家が海上権を争ってしのぎをけずったのは、すでに述べた通りである。

さて、ヨーロッパがそんな状態にあった時、ユーラシア大陸のはるか東、モンゴルの草原に一代の英雄チンギス・ハーンが出現した。

幼いころの名をテムジンというこの遊牧民族の英雄は、またたく間に周辺の諸民族を従えて帝位につき、中国北部の『金』の国を攻め、勢いにのって軍をはるか西方に向け、中央アジアから西アジア一帯に進出した。その騎馬軍団は刃向かう敵を皆殺しにし、財宝を奪い、町々を破壊して、人びとを恐怖におとしいれた。まだ抵抗をつづける中国南部の『宋』の国をのぞいて、チンギス・ハーンはアジア大陸一帯にまたがる広大な征服地の主となったのである。

一二一九年から前後七年におよんだチンギス・ハーンの西方遠征のニュースは、西アジアから地中海沿岸に伝わり、十字軍を通じてヨーロッパにもたらされた。だが、この段階では、チンギス・ハーンの討伐の対象がイスラム教徒であったことから、ヨーロッパの人びとは、彼を味方のキリスト教徒だと考えていたのだった。だが、その甘い夢はむざんに破られることになった。まもなく、ヨーロッパ自体がモンゴル軍の嵐のような攻撃におびえることになったのである。

チンギス・ハーンは一二二七年、現在の中国甘粛省の陣地で死んだが、彼は生前、そのとほうも

なく広い征服地を子供たちに分け与えた。そのなかで、長男のジュチはアラル海からカスピ海方面にかけての土地を与えられていた。やがてジュチが若くして死ぬと、その子バトゥが位をつぐ。彼は祖父の血をひく勇猛な将軍であった。そのバトゥに対して、チンギスの跡をついで全モンゴル人の大帝となったオゴタイ・ハーン（ジュチの弟）は、さらに西方へ進撃するよう命じた。

バトゥはボルガ河を越え、ロシアを討ち、ハンガリーに入り、別の隊にはポーランドを攻めさせた。すさまじい血と破壊の進軍だった。一二四一年、モンゴル軍がドイツのワールシュタットの会戦でポーランドとドイツ諸侯の連合軍を破った時には、ヨーロッパの人びとは『地獄からきた者――タルタル』の恐怖に色を失った。モンゴル軍の一部は、北はバルト海に、西はアドリア海岸にまで達したのである。一二四一年の末、大帝オゴタイが病死してバトゥは軍を返すことにしたが、もしオゴタイの死がなかったら、ヨーロッパ全土の運命もどうなっていたかわからなかった。バトゥは、ボルガ河下流のサライというところにとどまり、『キプチャク汗国』を創立した。

オゴタイ・ハーンの死後二代おいて、モンゴル帝国五代目の大帝となったのは、マルコ・ポーロが仕えた有名なフビライ・ハーンである。チンギスの孫の一人であったフビライの治世は、一二六〇年から九四年までつづいたが、この時代こそモンゴル帝国の絶頂期であった。

フビライは『宋』をしだいに追いつめるとともに、弟のフラーグにペルシャを征服させ、そこにフラーグ一統による『イル汗国』の支配を確立させた。この『イル汗国』とバトゥ一統の『キプチャク汗国』のほかに、中央アジアに『チャガタイ汗国』、モンゴル高原の西北に『オゴタイ汗国』があり、中国本土を中心とするフビライの直轄領と四つの汗国をあわせると、いまだかつて出現したことの

ない大帝国の地図が完成した。一二七一年、フビライ・ハーンは都を外モンゴルのカラコルムから大都（カムバリーク＝現在の北京）に移し、国の名を『元』と定めた。そして、一二七九年、ついに宋を滅ぼして、中国全土を完全に支配したのである。

けれども、絶頂期は同時に衰えのはじまりでもあった。モンゴル族どうしのうちわもめがしばしば起こるようになり、特にオゴタイ汗国のハイドゥ・ハーンの反乱にはフビライも手を焼いた。が、フビライはまれに見る政治的手腕の持主であった。彼は各汗国のゆるやかな結合をもとにして、力と技を使いわけながら、この大帝国を何とかまとめつづけた。そのため、商人たちの隊商も比較的安全に東へ西へと旅することができた。この状態を人びとは『タルタルの平和』と呼んだ。

このタルタルの平和こそ、マルコ・ポーロがあの大旅行を実現することができたいちばん大きな原因だった。現在『シルクロード（絹の道）』と呼ばれて親しまれているアジア大陸横断の道も、もしタルタルの平和がなくて多くの国に区切られていたら、そこにさまざまな障害が起こり、マルコ・ポーロの行く手をはばんだにちがいない。長い暗黒の中世において、タルタルの平和がたもたれていた一世紀ほどのあいだだけ、多くの人びとがシルクロードを往復し、東洋と西洋が結びついた。『元』の力が弱まってタルタルの平和が消えた時、東洋と西洋はふたたび切りはなされてしまったのである。

ともあれ、マルコ・ポーロはこんな時代にユーラシア大陸を三年半がかりで横断して『元』の国へ着き、フビライ・ハーンに重用されてその国に十七年もとどまり、やがて南の海へ出て東南アジアをまわり、インド洋を経てはるばる故郷のベネチアへ帰ってきたのだった。彼は冒険好きの商人として、非常に恵まれた時代に生きたといえるのかも知れない。

話をふたたびジェノバの牢獄にもどそう。

一二九九年の八月、マルコ・ポーロたちベネチア人の囚人は、思いがけず牢獄から解放された。

この年、相も変わらず軍備の充実に大わらわだったベネチア、ジェノバの両都市に対して、北イタリアのミラノ市が和平の仲介を申し出た。ベネチアもジェノバも長年の戦いにさすがに疲れはてていたので、ミラノ市をなかに立てて和平条約を結ぶことに同意した。七月三十一日に条約は調印され、およそ一カ月後の八月末にお互いの捕虜たちも自由の身となったのである。

マルコ・ポーロは彼の旅行記がすでに完成していたことを神に感謝したにちがいない。わが国へ紹介された時『東方見聞録』という素晴らしい名前をつけられたこの部厚い書物は、前年の一二九八年の終りまでには完成していたらしい。

牢獄を出て港へ歩きながら、マルコ・ポーロは何を考えていただろう。

ギラギラと輝く南ヨーロッパの夏の太陽の下で、ひろびろとした外の世界の明るさを満喫していただろうか。それとも、一刻も早く故郷ベネチアへ帰りたくて、うずうずしていただろうか。いずれにせよ、前半生を旅に過ごした自由人マルコにとっては、今ふたたび手にした自由こそ、何にもまして素晴らしく、貴重なものだったにちがいない。

だが、別の考えかたをしてみれば、あの石牢での幽閉の日々があったからこそ、彼の『見聞録』はできあがったのである。思い出をたぐり寄せる静かな時間、ルスチケルロというすぐれた文章家、多くの協力者――そのどれが欠けても『見聞録』は生まれなかったはずだった。

今、彼の半生の記念碑ともいうべきこの書物は、彼自身より一と足早く牢獄を出て、多くの人びとに読まれはじめていた。もっとも、聞こえてくる評判のなかにはかんばしくないものもある。この『見聞録』を大ぼら吹きのたわごとだとののしり、あざわらう人びともいる。が、そんな無理解や中傷も、少なくともこの時点では、一つの仕事をなしとげた喜びの前に吹きとんでしまったのではあるまいか。

マルコ・ポーロは、殺風景な石造りの牢獄の建物を何度も振り返りながら、ジェノバの町の石畳の道を、港へ向かって歩いていったにちがいなかった。

第一章 旅立ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com